

声に出して読みましょう。

# かぶと虫 ①

にいみなんきち  
新美南吉

—

お花畑はなばたけから、大きな虫おおむしが一匹いっぴき、ぶうんと空そらにのぼりはじめました。

からだおもが重いのか、ゆっくりのぼりはじめました。

地面じめんから一メートルぐらいのぼると、横よこに飛びはじめました。

やはり、からだおもが重いので、ゆっくりいきます。うまやの角かどの

方ほうへ、のろのろといきます。

見てみいた小さい太郎ちい たらうは、縁側えんがわからとびおりました。そして、は

だしのまま、ふるいもを持って追っおいかけていきました。

うまやの角かどをすぎて、お花畑はなばたけから、麦畑むぎばたけへあがる草くさの土手どての上うえで、虫むしをふせました。

とってみると、かぶと虫むしでした。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

「ああ、かぶと虫だ。かぶと虫とった。」

と、小さい太郎はいいました。けれど、だれも、なんともこたえませんでした。小さい太郎は、兄弟がなくてひとりぼっちだったからです。ひとりぼっちということは、こんなとき、たいへんつまらないと思います。

小さい太郎は、縁側にもどってきました。そしておばあさんに、

「おばあさん、かぶと虫とった。」

と、見せました。

縁側にすわって、いねむりしていたおばあさんは、目をあいてかぶと虫を見ると、

「なんだ、がにかや。」

と、って、また目をとじてしまいました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

「ちがう、かぶと虫だ。」

と、小さい太郎は、口をとがらしていいましたが、おばあさんには、かぶと虫だろうががにだろうが、かまわならしく、ふんふん、むにやむにやといって、ふたたび目をひらこうとしませんでした。

小さい太郎は、おばあさんのひざから糸切れをとって、かぶと虫のうしろの足をしばりました。そして、縁板の上を歩かせました。

かぶと虫は、牛のようによちよちと歩きました。小さい太郎が糸のはしをおさえると、前へ進めなくて、カリカリと縁板をかきました。

しばらくそんなことをしていましたが、小さい太郎はつまらなくなってきました。きっと、かぶと虫には、おもしろい遊び方があるのです。だから、きっとそれを知っているのです。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

そこで、小さい太郎は、大頭おおあたまに麦むぎわらぼうしをかぶり、かぶと虫むしを糸いとのはしにぶらさげて、門口かどぐちを出ていきました。

昼ひるは、たいそうしずかで、どこかでおしろをはたく音おとがしているだけでした。

小さい太郎ちい たろうは、いちばんはじめに、いちばん近くちかの、くわ畑ばたけの中の金平ちゃんなか きんぺいの家いえへいきました。金平ちゃんきんぺいの家いえには、しちめんちようしちめんちようを二にわかっていて、どうかすると、庭にわに出だしてあることがありました。小さい太郎ちい たろうはそれがこわいので、庭にわまではいっていかなくて、いけがきのこちらなかから中なかをのぞきながら、

「金平ちゃんきんぺい、金平ちゃんきんぺい。」

と、小さい声ちい こえでよびました。金平ちゃんきんぺいにだけ聞きこえればよかったです。しちめんちようしちめんちようにまで、

聞きこえなくてもよかったです。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

なかなか金平きんぺいちゃんに聞こえないので、小さい太郎ちい たろうは、なんどもくりかえしてよばねばなりませんでした。

そのうちに、とうとう、うちの中なかから、

「金平きんぺいはのオ。」

と、返事へんじがしてきました。金平きんぺいちゃんのおとうさんのねむそうな声こえでした。

「金平きんぺいは、よんべから腹はらがいつてのオ、ねておるのたて、きょうはいつしよに遊あそべんぜエ。」

「ふうん。」

と、聞こえないくらいかすかに鼻はなの中なかでいつて、小さい太郎ちい たろうはいけがきをはなれました。

ちよつとがっかりしました。

でも、またあしたになって、金平きんぺいちゃんのおながおれば、いつしよに遊あそべるからいいと思おもいました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

こんどは、小さい太郎は、ひとつ年上の恭一君の家にいくことにしました。

恭一君の家は、小さい百姓家でしたが、まわりに、松や、つばきや、かきや、とちなど、いろんな木がいっぱいありました。

恭一君は木のぼりがじょうずで、よくその木にのぼっていて、うかうかと、知らずに下を通ったりすると、つばきの実を頭の上に落としてよこして、おどろかすことがありました。

また、木にのぼっていないときでも、恭一君はよく、もののかげや、うしろから、わっというてびっくりさせるのでした。ですから小さい太郎は、恭一君の家の近くにいくと、もうゆだんができないのです。上下左右、うしろにまで気をつけながら、そろりそろりと進んでいきます。

ところがきょうは、どの木にも恭一君はのぼっていません。どこからも、わっというてあらわれてきません。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

「恭きょう一いちはな。」

と、にわとりに餌えさをやりに出でてきたおばさんが、きかしてくれました。

「ちょっとわけがあつてな、三河みかわの親類しんるいへきのう、あずけただがな。」

「ふうん。」

と、小ちいさい太た郎ろうは、聞きこえるか聞きこえないくらいに、鼻はなの中なかでいいました。なんということでしょう。なかのよかつた恭きょう一いち君くんが、海うみのむこうの三河みかわのある村むらに、もらわれてしまったということです。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

「そいで、もう、もどってきやしん?」

と、せきこんでちい小さい太郎はたろうききました。

「そや、また、いつかくるだらあずに。」

「いつ?」

「しょうがつぼんや正月にや、くるだらあずにな。」

「しょうがつほんとだねおばさん、しょうがつぼんと正月にやもどってくるね。」

ちい小さい太郎は、のぞ望みをうしないませんでした。ぼんにはまた、

きょういちくん恭一君と遊あそべるのです。しょうがつ正月にも。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒